

受付番号

留学・研究計画書

氏名 坂梨健太	留学機関名 国際熱帯農業研究所(International Institute of Tropical Agriculture)
留学先国名 カメルーン共和国	留学期間 西暦 2011年9月～2013年8月
研究テーマ アフリカ熱帯林における農業と森林保全の両立に関する研究	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>農業は食糧確保のために必要不可欠な活動である。しかし、アフリカ熱帯林において、その農法は森林を開き火入れを行う焼畑農業であり、熱帯林を破壊する大きな要因とされてきた。さらに20世紀初頭になると換金作物や化学肥料などの近代的な農業の導入が進み、多くの土地が利用されるようになったため、そこで暮らす焼畑農耕民は熱帯林を破壊する人々としてますます問題視されてきたのである。現在では森林保全のため国家による環境保護政策や国立公園の設置が行われ、その結果、住民の農業をおこなう領域が制限され始めている。そのような状況の下、現地住民の生きるための農業と世界的に重要な課題とされる森林保全の両立に関する研究が求められている。</p> <p>アフリカ熱帯林における人間と森林の共生に関する研究は、主に狩猟採集民が中心に扱われ、焼畑農耕民は森と敵対する存在として捉えられ、焼畑農耕民の農業を含めた経済活動と熱帯林の関係については十分に把握・検討されてこなかった。森林に大きな影響を与えると言われてきた焼畑農耕をおこなう人々と熱帯林のかかわりについて研究し理解を深めることこそが、食料生産と森林保全の両立を考えるうえで非常に重要である。</p> <p>今日、農業と森林保全の両立において最も注目されているのがアグロフォレストリーである。これは、森林を切らずに維持したまま持続的な農業を営むもので、農業と森林保全の両立を可能にする理想的な農法であると捉えられている。しかし、このアグロフォレストリーは、研究においては商品価値のある樹種の有効性や多様性など技術的な点に議論が終始したまま、実践においては現地固有の文脈を抜きにして、多くの熱帯地域で導入が進められている。</p> <p>以上のことを踏まえ、本研究ではアグロフォレストリーの理想とされているカメルーンのカカオ生産を対象に、現地固有の文脈、すなわち住民の農業だけでなく生きるための経済活動と森林との歴史的、社会的、文化的なかかわりを現地調査に基づいて把握・検討することを目的にする。</p> <p>本研究は単純に学術的な貢献だけでなく、現在、活発化している森林保全活動への新たな視座を提供できるものでもある。本研究では住民による現在の環境利用とその歴史的背景を明らかにするとともに、農業諸機関の担当者との意見交換やワークショップを通して、これまで対立的に見なされてきた焼畑農耕民の農業と森林保全の両立を目指したプロジェクト計画の立案に貢献することができる。カメルーンの熱帯林は、2002年からアメリカの巨額の援助によって開始されたCBFP (Congo Basin Forest Partnership) において森林保全の重点地域として設定されるなど世界的に注目されており、その意味でも大きなインパクトを与える研究となる。</p>	